

土粉遊びに出現する

知覚 - 運動行動の特徴に関する一考察

佐々木俊郎

はじめに

子どもたちは、自然や自然の素材を使った遊びから、基本的行動能力や運動能力、人間関係、自然環境について多くのことを学ぶことができる。しかし子どもたちが本来、遊びの中で身に付けてきた学びが子どもたちを取り巻く環境の変化により、多くの課題が挙げられるようになってきた。稚丸ら（2010）は、幼児の生活スタイルの変化に伴う問題として「運動不足の生活と動くことを嫌う幼児の増加」「夜型生活習慣と睡眠不足」また、幼児の遊び環境の変化がもたらす問題として「遊び空間の変化と減少」「遊び時間の変化」「遊び集団の変化」「遊び方法の変化」を取り上げ、幼児の身体発達と遊び環境の現状と問題点を述べている。

子どもたちは自然や自然の素材を使った遊びが好きである。とりわけ雨上がりにできた水たまりやどろどろになった土で遊ぶことが大好きである。しかし、大都市になればなるほど、ほとんどの道路が舗装され、また田畑や山林は宅地開発され、子どもたちがそうした水たまりや泥んこ遊びができる機会や場所が減少してしまい、保育所や幼稚園の園庭が数少ない泥んこ遊びが行える場所となっているのが現状である。

I 研究目的

『幼稚園教育要領・保育所保育指針』においては、幼児の健康安全能力の育成は重要な目標である。領域「健康」では、幼児が遊びを楽しみ、充実感を味わい、進んで運動しようとする意欲を育て、健康や安全に関する態度の育成がねらいとして挙げられている。そのねらいを達成するためには園で楽しい遊びをしっかりと体験することが不可欠である。

筆者らはどろ遊びに関する全国アンケート調査でどろ遊びが子どもの発達に有効だと思われる項目については回答の多い順で、創造力（162）、集中力（125）、強調力（92）、身体力（83）、言語力（31）、その他（25）であったと報告した。（武論文参照）

そこで、本論文は一般の保育所や幼稚園の園庭にある土ではなく、陶芸用の非常に粒子の細かい土の粉を用いて、粉へ水を加えることにより粘土へと変化し、さらに水を加えることによりどろろに変化し、さらにはまた粉を加えることにより粘土へと素材が変化していく過程において、子どもたちの行動に知覚-運動行動が出現するか、また出現した場合にその特徴を身体活動的な見地から考察を試みたものである。

II 研究方法

1 土粉遊びの分類

本論文では、土粉遊びを、竹井（2011）による分類を参考に、感覚遊び、ごっこ遊び、製作遊びの3つに分類し¹、子どもたちの行動を観察した。

2 期日および対象

平成24年7月～9月にかけて土粉遊びの実験経験のないA園、B園の年長児、E園の年中と年長児を対象に土粉遊びの実験を行った。園についての分類は、栗山論文を参照こと。

3 記録および分析

それぞれの保育所・幼稚園において複数のデジタルカメラによる静止画、複数のデジタルビデオカメラによる動画の撮影およびICボイスレコーダによる音声の録音を行い、視覚的・聴覚的に質的な分析を試みた。また、出現した動作は、体育科学センター（1980）の基本的な動作とその分類を参考に分析を行った。

III 結果と考察

1 知覚 - 運動行動の特徴

(1) A園における知覚-運動行動の特徴

A園ではガイロメ土と呼ばれる陶芸用の土の中でも非常に粒子の微細な土を用いて、子どもたちを7～8名にグループに分け、学生スタッフが各グループに入り活動の展開を補助する形で、土の粉から水を加え粘土へ、さらに水を加えどろへ、さらに粉を加え粘土へと変化していくという土粉遊びを実施した。

最初の江村による説明が行われているときに、土粉遊びに対し、「いやだー」「やらない」などと叫び、拒否反応を示す子どもや保育者にしがみついて離れない子どもが数名見られたが、全体的には子どもたちの顔がこわばり、説明に集中し、緊張した様子が見えなかった。

江村により土の粉が各グループに配られ活動が開始するまでは、どのグループもおとなしく粉を観察する姿が見られ、活動が開始すると初めは恐る恐る粉に手をだし、最初は指先で粉をつまんでこすりつけ、徐々に手のひらで粉のさらさらとした感触を確かめる姿が見受けられ、緊張から弛緩へと変化していく様子が見えなかった。（初期の感覚遊び）

この時点において、最初に土粉遊びに対して「いやだー」「やらない」と言っていた子どもたちも、周りの子どもたちの楽しそうに遊ぶ姿に誘発されて、ためらいながらも粉のさ

土粉遊びに出現する知覚 - 運動行動の特徴に関する一考察

さらさらとした感触を確かめる姿が観察された。しかし、保育者にしがみついて離れない子どもについては、依然として行動の変化は見られない。

粉の感触に慣れてきた子どもたちは、しだいに露出している腕や足の部分に粉を塗る動作を始め、中には顔に粉を塗り、「お母さんのお化粧みたい」（見立て行動）とお化粧ごっこ遊びを始める園児の姿も観察された。また、粉の粒子が非常に細かいため、力を加える（加圧動作）と固まるという性質を発見した子どもたちは、粉を集めてそれに力を加え（握り）、団子状にする姿も見られるようになり、感覚遊びからごっこ遊びへと変化していった。

このころになると、保育者にしがみついていた子どもも、保育者に抱っこされたままではあるが、保育者に促され少しずつ粉に手を出し粉のさらさらとした感触を確かめるようになってきた。

粉のさらさらとした感触を楽しんだ後、水を加え粘土へと変化させていったが、大きな粘土の塊のままみんなで粘土遊びを楽しむ子どもたちや自分の粘土を確保し個人で粘土遊びを楽しむ子どもなど、製作遊びを行う子どもの姿も見られるようになってきた。また数名の子どもたちはあくまでも粉にこだわり水を加えることを拒否し、小グループを編成し依然粉遊びを続け、粉のさらさらとした感触を楽しんでいた。

さらに水を加えどろへと変化させていくと、粉の時と同じように、最初は腕や足の露出している部分へどろ塗り遊びを始め、しだいに自分の洋服へ、さらには他人の洋服へとエスカレートしていく姿が見て取れた。

また、このころから雨が降り始め、屋根の外にあった粉が雨によってより水状に近くなり、そこが氷のように滑ることを発見した子どもはスケートのように立ったまま滑る（ロコモーション）ことやうまくバランスを保ち転ばないようにする（平衡感覚の獲得）ことを楽しみ始め、さらにはそれを見ていた子どもたちが加わり、野球のヘッドスライディングのように胸の方から横になって滑る（土粘土素材から生まれるあるいは引き出された特徴ある動作）子どもが多くなり、より大胆な行動へと発展していった。一方、大部分の子どもたちは、全身どろだらけの姿をし、お互いにどろを塗りあうことを楽しむ姿が見受けられ、ごっこ遊びと感覚遊びの混在が確認された。

このころには、はじめ土粉遊びを拒否していた子どもたちも、ほかの子どもたちと一緒にどろ塗り遊びやヘッドスライディングで遊ぶようになり、むしろ、ほかの子どもよりも大胆に遊ぶ子どもの姿も見受けられた。

保育者にしがみついて離れなかった子どもは、保育者のそばを離れないが、保育者から降り自分で泥団子をつくったりして遊ぶ姿が見られた。その後、粉を加え粘土へと再び戻す作業を行ったが、依然として4分の1近い子どもたちは滑ること（知覚－運動行動）を楽しんでいた。

(2) B園における知覚－運動行動の特徴

B園においてもガイロメ土を用いA園と同様の手順で土粉遊びの実践を行ったが、服装は7月の晴天の日ということもあり、汚れても良いように上着を脱いで泥んこ遊び用のパンツ姿で

行った。

B 園は土粉遊びの実践は初めてではあるが、江村や学生スタッフが、日頃から園を訪れて活動を行っているため、A 園とは違いしっかりと江村の説明を聞く姿が見られながらも、なごやかな雰囲気を感じられた。

江村が粉を各グループに分配すると、合図があるまでは粉に触ってはいけないという事前の指示があったため、手では触れていないが足を出して足の裏で粉のさらさらとした感触を確かめている子どもが多数みられ、早く活動を始めたいという態度が見てとれた。

活動が開始すると、最初から手や足に粉を塗り始める（微細運動操作）子どもが多く、すぐに粉を手ですくい頭からかぶる子どもの姿も見られ、A 園に比べ初めから大胆な行動をとる子どもが多く見られた。このことは日頃、江村と接していることにより緊張感が少なく、より大胆な行動に出たためと思われる。それに対し、日頃、江村とあまり親しく接していない子どもは、はじめは恐る恐る手をだし、指先で粉をつまんでこすりつけ、徐々に手のひらで粉のさらさらとした感触を確かめ、少しずつ手や足に粉を塗り始めるという、A 園と同様の行動が認められた。

活動が始まり少し経つと、土粉遊びを初めは恐る恐る手をだしていた子どもたちの行動も徐々に大胆になり、ほとんどの子どもが全身粉まみれの状態となった。このころになると、子どもの中には早く水を加えることを催促する姿も見られるようになった。そこには日頃江村がいろいろな遊びを教えてくれるという経験から、水を加えることにより粉がどの様に変化し、粉とは違った楽しい遊びができることを予測した行動であり、やはり A 園では見られない行動であった。

粉に水を加えると、子どもたちが歓喜の奇声を発し粉と水をかき混ぜるように混ぜ、最初は指や手につく粘土の感触を楽しみながら、それらを集め大きな粘土へと変化させ、全身を使ってこねる姿があちこちで見られた。だんだんと粉が粘土に変化してくると、子どもたちが自分の分の粘土を確保し、各自で泥団子を作ったり、恐竜や車を作ったりと、思い思いに粘土遊びを楽しむ姿が見受けられるようになり、感覚遊びからごっこ遊びや製作遊びへと変わっていった。これも A 園でおこなわれていた、みんなで一緒に遊ぶ姿とは異なるものであった。

さらに水を加えどろ状になると、A 園同様、全身にどろ塗り遊びを始める姿が多数認められた。また、子どもたちがお互いにどろを塗りあうだけではなく、学生スタッフにもどろ塗り遊びをする姿もあちこちで見受けられた。これは前述したように、B 園と本学が日ごろから交流があり、学生スタッフも身近な存在であるという意識から、それに伴う行動だと思われる。

また、やはりここでも A 園と同様、立ったまま滑ることを楽しむ子どもたちも現れたが、A 園の時と違い、晴天で滑る範囲があまり大きくないこともあり、A 園のようにヘッドスライディングをするような子どもはいなかった。また、保育者や学生スタッフの手につかまり恐る恐る滑る姿が見受けられ、これも A 園では見られなかった行動である。

(3)E園における知覚—運動行動の特徴

E園では黒木節土という、ガイロメ土よりもほんの少しだけ粒子の粗い土（江村論文参照）を用いた点と対象が年中と年長児であること以外はA園やB園と同じ手順で土粉遊びの実践を行った。

E園では、年中児と年長児を分け、さらにそれをそれぞれ3グループに分け年齢ごとの活動を行った。

最初の説明は全体で一緒におこない、活動を開始したが、活動が始まるとまず、年長児のグループがA園・B園同様に恐る恐る粉に手をだし感触を確かめてからより大胆な活動に移行していったのに対し、年中児のグループは大半がまず年長児の様子を観察し、それを模倣するように活動が始まった。ここに年齢による発育の違いを見てとることができる。

活動が始まっても、年長児はすぐに手や足に粉を塗り始めたのに対し、年中児は依然手のひらでこすりつけたり、粉を片手で握ったりして粉の感触を確かめたり、ややおとなしめに粉をかき回すような行動が続いた。

しばらくすると、年中児のグループも少しずつ活動が大胆になってきたが、年長児のそれにはまだ及ばない。そのうち、年中児の中での活動に物足りず満足できない子どもたちが、年長児のグループへ移動し、年長児と一緒に活動する姿が見受けられるようになった。これは、個人の発育の違いによるもので、同じ年齢でも活動の活発な子どもとそうでない子どもに活動の違いが現れたものであると思われる。

水を加え粉から粘土へと変化すると、粘土が手や足について体が汚れるのを嫌がったり、粘土の感触が嫌いで活動から離れたりする子どもが現れ、誤って粘土に触れ泣き出す子どもも出てきた。そのうち、身体が汚れるのを嫌がった子どもたちが集まり、粉遊びを続ける子どもたちのグループが結成された。ここに粉遊びを続ける理由としての多様性が見られた。このころになると、年中児と年長児が自分の好きなグループへ移動するようになり、年中児と年長児が混在するグループが結成されるようになってきた。

さらに水を加えどろへと変化していくと、最初年長児が活動していた場所はどろ場と化し、立って滑ったり、滑って転ぶことを楽しむ子どもたちが増えてきた。この活動については、年中、年長の差はないようである。E園では、最初は子ども同士で押し合っただけで転ばないようにしていた遊びが、保育者が加わり、さらに参加した学生スタッフも男性が多かったこともあり、他の2園では見られなかった子ども同士や大人と相撲をとる、バランスを取りながら遊ぶような行動も見られた。その一方で、汚れることを嫌う子どもたちは、最後まで粉遊びを続けていた。

2 知覚 - 運動行動の分類

表 1. 知覚 - 運動行動の分類

行動の形態	実際の動き	土の状態
初期の感覚遊び	感触を確かめる	粉、粘土、どろ
見立て行動	お化粧遊び、製作遊び	粉、どろ
加圧動作	固める（握る）、団子作り	粉、粘土
ロコモーション	スケート様動作	どろ
衝感覚の獲得	転ばないように滑る	どろ
素材の特徴のある動作	ヘッドスライディング	どろ
微細運動操作	指先でつまむ、かき混ぜる	粉、粘土、どろ
動作大筋運動	こねる、相撲様動作	粘土

IV まとめ

以上の結果と考察をまとめてみると、初めて土粉遊びを経験した子どもたちは、活動が始まって一様に、まず指先や手のひらで粉のさらさらとした感触を確かめる感覚遊びから始まり徐々に足や腕、さらには身体全体に粉やどろを塗る遊びへ、微細運動操作からより大胆な活動へ移行していくという共通行動が確認された。また、粉へ水を加え粘土へと変化していく過程において、初めは手や指でかき混ぜるという微細運動操作から、だんだん粘土が固まるにつれて、腕や上半身を使って粘土をこねる動作大筋運動への移行も確認された。

今回使用した粉は水をたくさん加えることにより、大変滑りやすくなるという特性をどの園の子どもたちも自ら捉え、ロコモーションやバランス遊びが行われたのも、知覚-運動行動の特徴といえるのではないだろうか。

粉から粘土へ、粘土からどろへと変化する過程においては、形態が変化することにより、必ず感覚遊びへ回帰する行動も一様に観察することができた。一方で、江村との人間関係が、今回の活動に大きな影響を与えることも確認することができた。

今後の課題として、活動実施後に保護者や保育者に対するアンケート調査を実施したり、何らかの動作分析等の方法を用いたりすることにより、分析結果を数値化し、より客観的な考察が加えられるようにすることが急務である。

土粉遊びに出現する知覚 - 運動行動の特徴に関する一考察

【注】

(1)竹井 史 (2011) P. 10.

感覚遊び（五感で感じることをそのままを「あじわう」遊び）、ごっこ遊び（ごっこ遊びやゲームなどのように「する」遊び）、製作遊び（材料などを使って何かを「つくる」遊び）と分類している

【参考文献】

稲丸武臣・花井忠征 (2010)『幼児の楽しい運動あそび身体表現 めざせガキ大将』圭文社.

平井久世 (2010)「粘土製作における「触れる」ことについての一考察」『京都大学大学院教育学研究紀要』第 56 号, pp. 279-291.

石倉貞子・竹井史 (2006)「造形表現を拓く自然素材の可能性」『富山大学人間発達科学部紀要』第 1 巻第 1 号, pp. 157-167.

前嶋英輝 (2009)「粘土場の遊びと環境」『美術教育』292, pp. 76-84.

文部科学省・厚生労働省 (2008)『幼稚園教育要領 保育所保育指針 <原本>』チャイルド本社.

仲盛 夫美子 (2011)「思いやりを伝え合うための援助の工夫 ～「粘土遊び」における表現活動を通して～」『那覇市立教育研究所平成 23 年度第 96 期研究成果報告会』.

体育科学センター (1980)「基本的動作とその分類」体育カリキュラム作成小委員会

竹井史 (2011)『光る泥団子の作り方付！ どんこ遊び 水遊び プール遊び』ひかりのくに株式会社.

手塚美恵子 (1981)「粘土で遊ぶ」『上田女子短期大学児童文化研究所所報』第 3 巻, pp. 18-26.

(名古屋経営短期大学子ども学科 准教授)